

**★第18回非同盟首脳会議がバクー宣言採択＝田中靖宏
主権と独立の擁護、核兵器廃絶の決意を表明
日本AALAがオブザーバー参加**

第18回非同盟首脳会議が10月25、26の両日、カスピ海に面したアゼルバイジャンの首都バクーで開かれ、創立時からのバンドン原則を擁護し、各国の主権と独立、核兵器廃絶への決意を表明したバクー宣言を採択しました。会議には120の加盟国と17のオブザー国・組織にゲストを含め150以上の国・組織の首脳と政府・組織代表が参加しました。オブザーバー資格をもつ日本AALAから田中代表理事のほか清水学、大村哲、浅尾剛の4氏が参加しました。

採択されたバクー宣言は、トランプ政権の登場で強まる一国主義、自国優先主義を強くけん制し、国連を中心とする多国間主義の擁護と国連憲章と国際法の順守と決議の実行を強調しました。そして国際社会は「多様な政治、社会文化の体制から成り立っており、それらは受け入れられ、尊重されなければならない」と指摘。「他国に特定のモデルを押し付け、主権を侵害するいかなる企てにも反対して対話と寛容を促進する」と表明しました。とりわけイランやキューバ、ベネズエラ、ニカラグアなどにたいする米トランプ政権の「一方的な強制措置」を国際法違反の人権侵害だと非難し、撤回を求めました。

また「核兵器の脅威を一掃する努力を倍加し」「核兵器のない世界をつくる決意」を表明。別に採択した最終文書のなかで、核兵器禁止条約の発効にむけた努力を表明しました。またパレスチナ情勢の悪化に懸念を表明、パレスチナ人民の闘いと権利の回復を支援する緊急行動をよびかけた特別声明を採択しました。

日本AALA代表団は、第54回大会で採択した活動方針にもとづき、①人道介入論など外部干渉の正当化を排して非同盟運動の原則をまもる②核兵器禁止条約の批准推進③軍事同盟下にある発達した諸国で非同盟を目指す運動の評価を求める提案を首脳会議に先立つ閣僚会議に提出。憲法9条を守る日本の平和運動を紹介する文書を配って、各国の代表と交流しました。

◆バンドン原則を堅持して「新たな現実」に対応

首脳会議の冒頭、ベネズエラのマドゥーロ大統領からアゼルバイジャンのアリエフ大統領への議長国の引継ぎが行われました。両側にはイランのロウハニ大統領、キューバのディアスカネイロ大統領、マレーシアのマハティール首相らが

着席して見守りました。アゼルバイジャンは北海道ほどの面積に人口千万人弱。1991年崩壊したソ連から独立しました。国内にナゴルノ・カラバフの民族紛争を抱え、隣のアルメニアと深刻な対立を続けていますが、2011年に非同盟運動に正式加盟しました。

開会で挨拶したアリエフ大統領は、欧州や旧ソ連諸国がNATO（北大西洋条約機構）やCIS（独立国家共同体）などに加盟して軍事同盟の関係を強めるなか、自国は外交政策が完全に一致する非同盟を選択し、各国から支持をえたと強調。東西文明の結節点に位置する国として、異なる文明や諸国の対話と融和を促進し、運動をリードしていくと表明した。

◆非同盟の役割と団結を強調

会議のテーマは「バンドン原則を擁護し、現代世界の課題へ一致し適切な対応を確保するために」でした。各国の代表は演説の中で、世界経済・金融危機で広がる貧困と格差の拡大、地球環境の破壊で世界は大きな挑戦に直面していると強調。とりわけトランプ米政権など国際法や国連の原則をかえりみない一国主義の広がり、非同盟運動をかつてない困難に直面していると危機感を表明しました。

マレーシアのマハティール首相（92歳）は、イラク戦争時に各国に「米国の敵か味方か」を迫って戦争を強行しイラクを破壊した米国がいま、一方的にブロックをつくって特定の国を敵視し、国連の承認なしに、「民主主義と政権転覆の輸出」を企てていると批判。貿易戦争や大国対立の深刻化とあわせて「世界は依然として恐怖の中に生きている」と警告しました。これにたいし、非同盟諸国の側は、パレスチナ問題の悪化に加えてインドとパキスタン、イランとサウジなど内部対立が激化して「かつての団結が失われてしまった」と率直に問題を指摘。バンドン原則にたちかえり、対話と平和的手段による紛争の解決に徹して、大国の横暴や覇権主義に対抗しようとよびかけました。

バクー宣言は、こうした危機感を反映して、バンドン原則を維持して非同盟運動を活性化し、政策を調整して団結を強化する必要をうったえました。

◆日本AALA代表団の活動

日本AALAは非同盟創立時からオブザーバーの資格をもつアジア・アフリカ人民連帯機構（AAPSO）の常設書記局メンバーとして、第11回首脳会議から代表を送って参加してきました。首脳会議ではAAPSOのハディディ議長とともに、非同盟の創立原則の堅持と市民組織、民間団体の活動の役割を訴えました。閣僚会議では、日本AALAの提案を事務局に再度提出するとともに、南ア、ケニア、エジプト、カザフスタン、ミャンマー、イラン、グアテマラ、キューバ、ニカラグア、ベネズエラ、プエルトリコの外交団のほか、世界平和評議会や非同盟人権擁護機関、国連難民支援機構、世界保健機構など国際組織の代表と懇談して、資料を私しました。

（以下は参加した大村哲常任理事の報告から抜粋）

田中靖宏代表理事（団長）のほか清水学さんが日本AALA国際部員として団員の資格で、大村哲常任理事と浅野剛全国理事が随員として参加しました。

到着するとVIP待遇

非同盟諸国（NAM）首脳会議に4名が参加することになり、田中代表理事が、在日アゼルバイジャン大使館、カイロのAAPSO事務局、バクーのサミット準備委員会の事務局とやりとりをして参加登録した。10月23日午前、バクー市の国際空港に到着。出迎えがあり、空港ビルに行かずにVIP用の出口待合室へ。マイクロバスでホテルまで送り届けてくれた。アゼルバイジャン政府による至れり尽くせりの歓迎ぶりだった。

宿泊するホテルに荷物を置いた後、すぐNAM閣僚会議が開かれているホテルに。登録した顔写真が入ったIDカードを受け取り、会議開催中のホールへ。AAPSOの席を探して日本AALAの正式代表2名がそこに着席。随員の私は、最後列の椅子が多数並んでいる場所で傍聴した。閣僚会議にはAAPSO代表団長のハディディ議長は参加しておらず、田中代表理事が団長格。コーヒー・ブレイクや昼食休憩の時間は、他国からの参加者との交流機会だ。準備していった3文書を持ち懇談した各国や組織の代表たちに手渡した。

警備が厳重な首脳会議

首脳会議は閣僚会議とは別のバクー・コンベンション・センターでおこなわれた。120カ国以上の国・組織の人々が集うので、警備は厳重だ。ホテルとサミット会場の間には、アゼルバイジャン政府が運営するパトカーに先導されたシャトル

バスが幾便も運行された。広い会議場には正式の代表団しか入れず、随員はロビー脇にある映画館のようなホールでスクリーン上の会議を見守った。その I D 取得に時間がかかり、アゼルバイジャン政府係員として、AAPSO のハディディ議長と、日本 AALA 派遣団の世話をしてくださったのが、アリエバさんである。本当によくサポートしてくださった。

市内観光で庶民生活にふれ

首脳会議が終わった翌日 10 月 27 日（日）は、観光。ソ連軍の侵攻の犠牲になった「殉教者の小道」付近を見学した後、旧市街に。「乙女の塔」と「シルバンシヤフハーン宮殿」は日本の城下町以上に複雑な道。その後は、郊外の「ゾロアスター教寺院跡」を見学した。翌日は出発までの時間を利用してカスピ海沿いの公園でのんびり。その後、デパートやスーパー・マーケットに行き、庶民の生活にふれた。

バクー宣言の骨子

- ◆非同盟運動の役割を活性化し、現在の政治的現実にもふさわしいものにする。非同盟諸国への新たな脅威に立ち向かい団結して効果的なメカニズムを作る。
- ◆国連中心の多国間主義を支援。異なる政治、社会体制を相互に尊重し、特定のモデルを押し付けてはならない。国連総会の活性化と安保理の民主的改革をめざす。国連憲章と国際法を守り、義務を履行する。
- ◆各国の主権と独立を厳格に守り、合法政府に対する不安定化策動を非難。相互不可侵と武力不行使の原則。違反に必要な措置をとる。
- ◆あらゆる形態のテロとたたかう連帯と協力の強化。テロリズムを特定の宗教、国籍、文明、民族集団とも関連づけることに反対。
- ◆大量破壊兵器、特に核兵器の存在が人類最大の脅威。核兵器のない世界を実現する決意を表明。平和目的の原子力エネルギー開発する国の主権。
- ◆航海の自由と資源の自由な流れの維持。平和維持活動は国連憲章を厳守して当事者の同意と武力の不行使の原則で。
- ◆持続可能な開発のための 2030 アジェンダを履行。温暖化対策や国際貿易交渉では途上国の利益と開発の権利を尊重すべき。
- ◆一部の非同盟諸国への大国による一方的な強制措置は国際法違反の人権侵害であり、撤回をもとめる。
- ◆人権の促進と保護を誓約。その強化は普遍性、透明性、公平性、非選択性、非政治化、客観性の基本原則を遵守し、開発の権利も含む。

- ◆パレスチナ問題の解決と中東難民の処遇へ緊急の努力をよびかけ。
(以上)